様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４６０３
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３０００４３

研究課題名（和文）春秋戦国期における燕国系遺物の年代と産地に関する研究

研究課題名（英文）A study about the age and the production area of the Yan Guo and Liaoning Area Remains in the Spring and Autumn Warring States Period

研究代表者
小林　青樹（KOBAYASHI, Seiji）

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：３０２８４０５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、春秋・戦国期における燕国の鋳造鉄器を中心とした燕国系の遺物について、燕国の中心地のあった河北省において各種遺物の基礎的な型式学的・技術的な検討と年代を明らかにするのが目的である。その上で、紀元前６世紀以降、この燕国系遺物が拡散した東方の諸地域（遼寧・韓半島・日本列島）において、燕国系とされる遺物の産地（燕国産かその影響を受けた燕国系か）と年代を確定するのが目標である。これにより、最近、壱岐や沖縄で発見されはじめた燕国系遺物をはじめとして、春秋・戦国期において燕国が東方の諸地域に与えた影響について明らかとなり、東北アジアにおける当該研究に新たな視点を与え歴史像の見直しとなるだろう。

研究成果の概要（英文）：　This study examines how the early iron objects culture was characterized mainly by the Yanxiadu remains (the cast iron objects and another objects) of Yan State in the Spring and Autumn Warring States Period expanded from Liaoning (Liaoxi/ Liaodong) , which was the area placed under the dominance of Yan State, to the northern Korean Peninsula. It also clarifies how the Yanxiadu remains spread beyond the above area over the Korean Peninsula and the Japanese Islands,Iiki Island and Okinawa Islands.
As a result of the above study, it is possible that the Yanxiadu remains before the intermediate time of the Yayoi Period correspond to those in the Yan State in the Warring States Period, the Unified Qin Period, and the first half of the Former Han Period, according to a new view on the Yayoi Period, and this idea should be re-studied.

研究分野：東アジア考古学

キーワード：春秋戦国期　燕国　年代　産地　中国　鋳造鉄器　土器　青銅器

１．研究開始当初の背景

本研究は、春秋戦国期の燕国における鋳造鉄器の変遷と東方へそれが拡散した点についての検討がベースとなった。この問題について、鋳造鉄器の研究者を連携研究者とし、現地での詳細な観察によって検討することとなった。

２．研究の目的

本研究は、春秋・戦国期における燕国の鋳造鉄器を中心とした燕国系遺物について、燕国の中心地のあった河北省において各種遺物の基礎的な型式学的・技術的な検討と年代を明らかにし、紀元前６世紀以降、この燕国系遺物が拡散した東方の諸地域（遼寧・韓半島・日本列島）において、燕国系とされる遺物の産地と年代を確定することにある。

３．研究の方法

研究は、Ａ～Ｃの３つの計画課題を設定して併行して進める方法を設定した。すなわち、①河北省を中心とした「燕国における鉄器・明刀銭・土器の検討」で問題となる資料の調査の計画課題Ａ、②内蒙古自治区・遼寧省・韓国に流入した燕国系遺物の観察調査の計画課題Ｂ、③日本列島における燕国系遺物の観察調査の計画課題Ｃ、以上である。このうち、河北省の資料は膨大であるので、２年間継続して調査を実施した。

４．研究成果

（１）燕国における鋳造鉄器を中心とした検討

計画課題Ａは、河北省を中心とした燕国産資料の調査である。

計画課題Ａを遂行すべく中国河北省において調査を行った。河北省では、燕下都遺跡、河北省文物考古研究所、河北省文物中心、河北省博物院、邯鄲市博物館を訪問した。燕下都遺跡では、燕国の土器を中心に遺物の観察を行った。

河北省博物院においては、燕国の鋳造鉄器関係遺物が多数展示されており、製品の他に鉄製の鋳型が注目される。鉄製鋳型は、単合范製と双合范製の２種類があり、精緻な観察とスケッチを実施した。その結果、北朝鮮の龍淵洞遺跡出土の燕国系鉄斧の特徴をもつ鋳型を見出した。

また、河北省博物館と邯鄲博物館においては、中山国と趙国の鋳造鉄器関係の遺物（鉄製品や鋳型）の実物観察を行うことができ、燕国における鋳造鉄器生産が行われていた戦国時代における周辺国の状況を新たに知ることができた。

また、調査を行った資料は少ないが、広島大学の鉄器研究グループの協力を得て、技術的な視点での検討を深め、燕国と同時期の鉄器生産についての検討を行った。その結果、鉄器と青銅器を同所で生産していることが明らかになり、この方式が燕国とその他の国々においても共通していることが判明した。この結果は、日本中国考古学会の 2014 年度大会において発表した。こうした鉄器の生産方式と燕国と類似した鉄器生産は、さらに山東半島の斉国でも存在することが予想された。

これを受けて、山東省で実施した現地調査においては、山東省文物考古研究所において斉国の鉄器資料を見学し、山東省考古研究所臨淄工作站、斉文化博物院で鉄器資料を見学した。これら各所での検討を通じ、燕国とならび斉国においても鋳造鉄器生産が盛んで、同種の鋳型を用いていることが明らかとなった。詳細については、報告を待たなければならないが、今後問題となる新知見であろう。特に、燕国と同じように鉄斧に二条突帯をもつものが多い点が注意された。

そして臨淄の斉国故城からは、中国ではじめて戦国時代後半期の鉄製鋳型の土製鋳型が出土しており、実物を実見することができた。これまで斉国では、統一秦代以降、漢代に鉄器生産が行われていたことはわかっていたが、戦国時代にまでその時期がさかのぼることが判明した。

以上の諸点からみて、これまで燕国の周辺地域において検討されてきた遺物の多くが、燕国系であるとみなされてきたが、燕国以外のものが含まれている可能性が高まった。特に、山東半島の斉国において生産されていた鉄器については、報告が少なく、これまで日韓において見出されている初期鉄器資料の中に、斉国産のものが含まれている可能性があろう。

（２）日韓における燕国系遺物の検討

計画課題ＢとＣについても、新知見をえることできた。

戦国時代における燕国の東方への進出の問題と韓半島における燕国系遺物の問題を考えるため、計画課題Ｂでは韓国における鉄器の調査を実施した。調査では、光州博物館において光州地域における鉄器と関連資料の調査を実施し、全州博物館において近年発見された全州地域の初期鉄器資料の見学を実施した。また、羅州の全南文化財研究院所蔵の初期鉄器資料と羅州博物館についても調査を実施した。

これらの調査において興味深い点は、燕国系鉄器の種類において特徴がある点が再確認できたことであろう。韓半島においては、日本列島に比べて、鉄斧の場合は、二条突帯をもつものが極めて少ない。この点からみて、燕国系の鉄器のなかでも、単合范製の鋳型の影響がまず韓半島に流入している可能性が指摘できた。先に触れた、北朝鮮の龍淵洞遺跡出土の鉄斧が、燕国系鉄斧の特徴をもつことと関係しているであろう。すなわち、前４世紀頃、燕国系の単合范製の鋳型を用いる鉄器生産が韓半島北部に流入し、この生産方法が韓半島で用いられるようになった。

また、羅州地域など統一秦代から漢代初期ごろにおける韓半島西南部における初期鉄器資料の増加については、先ほど触れた斉国系の鉄器の流入を想定できるかもしれない。

以上、近年の韓半島における初期鉄器資料の増加の実態を把握でき、本研究にとって大きな成果をもたらすことになった。

一方、国内においては、多数の燕国系鉄器がしられているが、なかでも問題となる資料の検討をおこなった。まず、佐賀県土生遺跡の燕系鋳造鉄器の影響を受けたと考えられる韓半島系の木製踏み鋤の調査を実施した。本資料の歯の先端には、鉄器を挿入した可能性のある痕跡があり、弥生時代前期末から中期初頭という時期からみて燕国系の鉄器の装着が想定された。

また、九州北部で問題となる燕国系資料としては、中期前半段階の佐賀県吉野ヶ里遺跡出土の鉄製刀子がある。本資料は、刀身が鉄製で、環頭部分は銅製で作られている。このような資料は燕国の副葬品として出土しているものに類似し、今回は燕国系として認定した。吉野ヶ里遺跡では、本研究期間中に遺跡から出土した鉄器の総括報告がなされた。現地での検討も行った結果、吉野ヶ里遺跡では、中期後半と後期の段階に鉄器を多く使用するピークがある。これは、従前から考えられていた傾向である。しかし、今回の報告では、中期前半にも鉄器使用のピークがあり、中期後半の量をわずかにこえていた。この傾向は、前期末から中期前半において、燕国系の鉄器資料が、予想以上に日本列島に流入したことを示している。

そのほか、沖縄においても燕国系の土器と鉄器、明刀銭が出土していることを明らかにした点も評価できるであろう。

今後は、こうした燕国系鉄器としている資料のなかに、斉国系などの資料を見出す作業を行っていきたい。それにより、初期鉄器からみた新しい弥生文化像を構築できると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①小林青樹・野島永、古代中国における鉄器研究の最前線、中国考古学、査読有、15 号、2015、1-4

②小林青樹、銅剣の起源、栃木史学、査読無、第 28 号、2013、14 – 37

③小林青樹、ユーラシア東部の青銅器文化ー弥生青銅器の起源をめぐってー、国立歴史民俗博物館研究報告、第 185 集、査読有、2013、213 – 238

〔学会発表〕（計２件）

①小林青樹、宮本一夫、古瀬清秀、野島永、新里貴之、石川岳彦、春秋戦国時代における銅鉄同所生産の諸問題、日本考古学協会第 81 回総会、2015、帝京大学（東京都八王子市）

②小林青樹・宮本一夫・伊藤慎二・新里貴之、沖縄諸島における弥生文化併行期の大陸系資料の再検討、日本考古学協会第 79 回総会、2013、駒澤大学（東京都世田谷区）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

小林　青樹（KOBAYASHI, Seiji）
奈良大学・文学部・教授
研究者番号：30284053

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

宮本　一夫（MIYAMOTO, Kazuo）
九州大学・人文科学研究院・教授
研究者番号：60174207

野島　永（NOJIMA, Hisashi）
広島大学・文学研究科・教授
研究者番号： 80379908

新里　貴之（SHINZATO, Takayuki）
鹿児島大学・埋蔵文化財調査センター・助

教
研究者番号： 80379908

(4)研究協力者
古瀬　清秀（FURUSE, Kiyohide）
広島大学・文学研究科・名誉教授

石川　岳彦（ISHIKAWA, Takehiko）
東京大学・大学院文学研究科・助教

白　雲翔（BAI　Yunxiang）
中国社会科学院・考古研究所・副所長

金　想民（KIM Songmin）
韓国国立中央博物館・学芸研究員

伊藤　慎二（ITO Shinji）
西南学院大学・国際文化学部・准教授